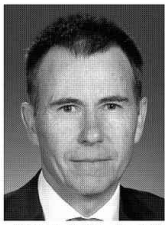
Asia を読む
from NIKKEI Asia

米と東南ア、2国間外交を

リチャード・モード氏
アジア・ソサエティー・オーストラリア
政策担当エグゼクティブディレクター



Richard Maude　オーストラリア政府の外交アドバイザーなどを経て、2020年から現職。専門は豪州とアジアの2国間関係など。

東南アジア諸国連合（ASEAN）は存在意義や内部の結束など数々の試練に直面するなか、10月下旬に首脳会議と関連会議をオンラインで開いた。一連の会議で最も重要だったのが、米国や中国、ロシアを含む18カ国体制の東アジア首脳会議だっただろう。

ASEANは、経済共同体などとしてインド太平洋地域の中心的な地位を占めるなど、大きな成果をあげてきた。しかし2020年以降、新型コロナウイルスの感染拡大の社会的・経済的影響を受けた。21年2月のミャンマー国軍によるクーデターへの対応も成功していない。米国が、中国とバランスをとる動きを強化しようとしており、ASEANも地政学的な問題に直面している。

ASEANは、多国間協力の枠組みで、ASEANが主導的な役割を担うことを意味する「中心性」という考え方を育んできた。対立の多い時代に一定の主体性を保ち、大国の行動に影響を与えることも期待してきた。だがASEAN外交の中心性は、最近のインド太平洋の枠組みづくりのなかで、実体を伴わなくなってしまった。

米国、英国、オーストラリアの新たな安全保障の枠組み「AUKUS（オーカス）」は、インドネシアやマレーシアなどASEANの一部の国には、（軍拡競争につながるとして）懸念される動きだ。一方、日本と米豪、インドの枠組み「Quad（クアッド）」は中国を抑え込む狙いはあるものの、（安保だけが対象ではないため）民主主義の国々の安全な地域の秩序を築こうとしているようだ。

ASEANの不安は主に、将来の紛争に巻き込まれることと米中どちらかを選ばなければならなくなること、自らの存在意義を失ってしまうことだ。実際にASEANに求められるのは、クアッドやオーカスのような枠組みと生産的に共存することだろう。

クアッドが中国外交への懸念に対応するため独自の選択をする権利を、ASEANは認める必要がある。インドネシアとマレーシアは、オーカス創設に伴う豪州の原子力潜水艦の開発計画などに懸念を示すようだが、中国の軍の近代化についてASEANが議論をするのは必要だと感じていないようだ。

米中対立との関わりではなく、固有の価値が評価されているのだと東南アジアを説得するために最も重要なのは、個別の2国間の外交だ。米国の外交は軌道修正が必要になる。

バイデン米政権による、ASEAN各国へのワクチン供給の拡大方針は評価に値する。だがオースティン国防長官とハリス副大統領はインド太平洋戦略にとって重要なシンガポールやベトナム、フィリピンは訪問したが、インドネシアを訪れていない。インドネシアは後回しにされているのではないかと懸念している。

米国内の難しい課題と超大国としての世界的な懸念事項を考えると、バイデン政権はどこにでも向かえるわけではない。とはいえインドネシアはASEANの要であり、20カ国・地域（G20）のメンバーであり、世界第4位となる（約2億7千万人の）人口を擁する経済大国だ。

米国は、インドネシアの将来の繁栄と安定に大きな直接の利害を持つ。民主主義国として成功を収めているインドネシアは、東南アジアが中国に支配された場合、米国の最良の拠点にもなる。米国は、インドネシアにもっと注目すべきだ。

関連英文はNikkei Asiaサイト（https://asia.nikkei.com）に

掲載日 2021年11月6日 日本経済新聞 朝刊 9ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。